



くすのき



No.112

R5年3月発行

◆逃げられなかった闇バイト◆

闇バイトに応募した初対面同士の強盗団による事件が頻発しています。指示役グループが逮捕されましたが、同じような指示役グループは他にもあると考えられています。SNSなどで「高額バイト」「日払い」などの条件を見て応募したらすぐに個人情報や家族情報を求められ、情報を握られてしまってから、仕事は強盗だよ、特殊詐欺の受け子だよと告げられる。断ると親を脅迫すると言われ泣く泣く加担せざるを得ない、暴力団と同じような勧誘方法です。

背景には若者の貧困があると言われています。少年の刑法犯が激減する中、令和3年、知能犯（特殊詐欺を含む）で検挙された少年で、動機を「生活困窮」とした者は前年の4倍を超えています。親世代の経済状況、母子世帯の増加と女性の低賃金、生活保護を受けるには大学や専門学校を続けられない。スキルがないと就職できない。いい学校を出て就職してもブラック企業で精神疾患になり働けない。親も収入減。頼れる人はいない。自分で何とかしないとイケない。貧困の背景には孤立もあるのかもしれない。



少年の刑法犯が減少し不登校や自傷行為が増えていることについて、犯罪社会学の土井孝義教授は次のように述べています。高度経済成長期の日本ではそれぞれが頂上を目指して登っていた。周りのことを気にせず、努力さえすれば報われた。1990年代に名目国内総生産は横ばい、言わば平坦な高原地帯となった。しかも“もや”がかかっている。どこを目指していけばいいかわからず、努力をしてもこれ以上高いところには行けない。他の人がどこを目指しているのかが気になり不安が募っていく。人間関係に不安があるため、同じ価値観を持つ小さなグループの中に閉じこもる。そのため、他の環境にいる人と比較することもなく、自分が劣悪な環境にいても気づかない。かつて少年犯罪が多かった頃、高度経済成長期に思春期を迎えた親と、高原地帯の子どもの間で価値観が異なることで不満が募り、不満を爆発させる形で犯罪行為があった。現在の子どもは親も高原地帯で思春期を過ごしており価値観が同じで親子間の不満はなくなったため、不満を爆発させる犯罪は少なくなった。一方、不安が強くなったことで、不登校や自傷行為（無差別殺人を自傷行為の一種と捉えている）が増加したと見立てています。若者の孤立を防ぐために、思春期にいろいろな世代や考え方の人物と出会い新しい世界に触れ、刺激を得て、自分の可能性を知るための場の提供が必要と訴えています。

<参考資料>※若者を闇バイトに引き寄せる「経済的困窮」（ニューズウィーク日本版）
 ※日本の10代はいま：“もや”のかかった平坦な「高原地帯」を歩く若者へ（nippon.com）
 ※「親ガチャ」という言葉が現代の若者に刺さりまくった「本質的な理由」（現代ビジネス）

◆一月～五月は「春のあんしんネット・新学期「斉行動」期間です◆

◆4月の補導予定◆

補導員全体会

19日(水)13:30から

市民会館2階 東ホール

よろしく
 お願いします



◆編集後記◆

本年度の補導・補導情報交換会、ありがとうございました。皆様のおかげで本市の小中学生や若者の非行や犯罪行為は本年度も減少しています。日中から夕刻にかけて子どもや若者の姿は年々少なくなっています。そして、不穏な雰囲気だたむろしたり喫煙したりする中高生もほぼ皆無です。徐々にマスクが取れて世の中の自由度が元に戻ってくるでしょうけれど、いっそう安全で非行や犯罪等の少ない蒲郡市になっていくようお願いしてやみません。子どもや若者をはじめ市民ぐるみで声を掛け合う良き街になっていくとよいですね。梅が咲き、桜のつぼみが膨らみ始めました。夢と希望の春がやってきます。「春風や 闘志いだきて 丘に立つ」（高浜虚子）…若者の熱い息吹が未来を創ります。

